

武蔵野日曜集会

不虔と不義

—— ロマ書第1章18～32節 ——

1978年2月26日(武蔵野)

小池辰雄

神を神の故に崇める 神の義の叫び 日曜日の集会はキリストにしがみついたため 不虔と不義 頑固か砕けるか 被造物の中に神性が現れている 現象において本体を見る 地獄行きの罪 ダンテの地獄 地獄は罪の認識のため キリストの敬虔と義をいただいて

【ローマ1・18～32】

18 それ神の怒は不義をもて真理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對いて天より顕る。19 その故に神につきて知り得べきことは彼らに顕著なればなり、神これを顕し給えり。20 それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世の創より悟りえて明かに見えるべければ、彼ら言い遁るる術なし。21 神を知りつつも尚これを神として崇めず、感謝せず、その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。22 自ら智しと称えて愚となり、23 朽つることなき神の栄光を易えて朽つべき人および禽獸・匍う物に似たる像となす。

24 この故に神は彼らを其の心の慾にまかせて、互いにその身を辱しむる汚穢に付し給えり。25 彼らは神の真を易えて虚偽となし、造物主を措きて造られたる物を拜し、且これに事う、造物主は永遠に讃むべき者なり。アアメン。26 之によりて神は彼らを恥すべき慾に付し給えり、即ち女は順性の用を易えて逆性の用となし、27 男もまた同じく女の順性の用を棄てて互いに情慾を熾し、男と男と恥ずることを行いて、その迷に値すべき報を己が身に受れたり。28 また神を心に存むるを善しとせざれば、神もその邪曲なる心のままに為まじき事をするに任せ給えり。29 即ちもろもろの不義・悪・慳貪・悪意にて満つる者、また嫉妬・殺意、紛争・詭計・悪念の溢るる者、30 讒言する者・誇る者・神に憎まるる者・侮る者・高ぶる者・誇る者・悪事を企つる者・父母に逆う者、31 無知・違約・無情・無慈悲なる者にして、斯る事どもを行う者の死罪に当るべき神の定を知りながら、ただに自己これらの事を行うのみならず、また人の之を行うを可しとせり。



● 神を神の故に崇める

18 それ神の怒は不義をもて真理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對して天より顕る。

これは大変な言葉です。聖書の中で一番重々しい言葉の一つでしょう。「神の怒」という。神の怒という言葉はパウロは時々使っています。エペソ書5章6節、

「汝ら人の虚しき言に欺かるな、神の怒はこれらの事によりて不従順の子らに及ぶなり」

これは今のローマ書と同じです。「不虔」ということと「不従順」は内容的には同じことで、神を神として敬わないことを不虔と言う。また、不従順と言うわけです。ミルトンが「パラダイス・ロスト(失樂園)」の最初にその事を言いました。

「人間の不従順によつてこの罪が来た」

と。敬虔ならざることです。「虚しきこと」というのは偶像崇拜のことを言う。偶像崇拜は御利益信仰なんです。いわゆる幸福主義です。これはヒルティの言う「幸福」とは違う。御利益宗教、民間宗教はたくさんあります。それと福音は違うんです。神を神の故に崇める。人間の側の如何にという問題でなくて、神を神の故に崇めるといのが、これが敬虔ということなんです。だから、こちらの態度は従順ということ。従うということ。それを徹底的にやったのがキリストです。

「聖意を成させ給え。汝の意志が成就するように。天地にまたこの自分を通して」と言つて、従つた。

「御意の天になる如く地にも成らせ給え」

というのが、これが本当の敬虔の告白です。「我々の願いが成るように」ではない。

「汝の本願が成ることが一番嬉しい」

というのが本当の信仰なんです。それでないのが即ち、偶像崇拜的な自己本位なものであって、どんなにそれは内容がよさそうに見えてもだめです。

神さまの怒はそういつた「不虔」(アセディヤ)と「不義」(アディキア)に臨んだと言う。不虔から不義が生じてくるので、実は最大の罪は不虔なんです。罪とは「この思いかの行いがよかつたの、悪かつたの」なんて、そんなことではない。「神を神としない」ことが罪なんです。神を神としないことが不信仰なんです。そういう基本的な大事な心の向きというものが、いわゆるクリスチャンと言つても、果たしてどれだけ本当に捉めているか。

ただ「めでたし、めでたし。病が癒された」と、そんな事を喜んでるのは、それは本当の信仰の本筋からずれてしまう。だから、キリストに癒された人たちが本当の信仰に入らなかつたではないですか。すばらしいキリストの業が現れて、それを受けても本当の信仰の受け方をしないで、癒されたことを喜んでる民衆はキリストに背いた。十字架にかけるその扇動に乗つかつてしまった。使徒すらも本当の意味では従えなかつた。キリスト



の名を使って不思議な業をしても、それはだめなんです。それはキリストがマタイ伝の7章の後ろの方で言ってるんですよ。あれは大事な言葉です。聖意が成るのではなくて、あれはまじわぎになるんです。本当に神の栄光が現れるという意味では、いくら不思議が現れたってかまわない。それは観念信仰ではだめなことはわかっている。だから、どうぞ皆さんは単なる現象にとらわれないでください。現象の起きている質は何であるかということです。

● 神の義の叫び

いいですか。厳しいですよ。我々の信仰がどれだけ本筋のものであるかということを感じてください。無教会は信仰の筋はかなりよかったです。ところが、筋がよくても今度は、中身が霊の生命が足りなかった。だから、観念信仰もだめだし、御利益ももちろんいかに。そうかと思うと今度は、霊的に高揚してしまつて霊的な傲慢になったら、これもいかに。パウロが本当に捕まえられたところの信仰はそんなものではない。しかも、もの凄く豊かなものです。そういう構造と、そういう質とを皆さんはしっかり掴んでください。ローマ書はそのためにやっているんですから。

なぜ、神の怒があるかというところ、神の義が叫ぶのがこの怒なんです。神の義の叫びがこの怒です。この義の叫びが、はじめルターは恐かった。恐かったのは、いいですよ、これは悪くはない。ルターは神の義が恐ろしくて、もうやりきれんと、

「どうして、私は神さまの前に本当に義であり得るか」

と行って苦しんだ。とうとうだめなんだ。彼はぶつ倒れてしまった。ルターの、義を求めた求めは、幸福を求める求めよりか正しかったんです。ところが、神さまは、この義はただ審く義ではなかった。義は審きを持ってますよ。けれども、その義は与える義と変わった。これはイザヤ書にも書いてある。

「わが義は近づき、わが救はずでに出たり」(イザヤ51・5)

と言う。義と救が同義語に使ってある。ルターがそのことに気が付いてから、神の怒は愛の別な現れ方であったということがわかった。怒のうちに愛があることが分かった。愛と救いの愛です。可愛がる愛ではない。愛するとは救うこと、助けることです。人間相互の間でも、我々が人を愛するというのは、その人を救う、助けるということ、担うということですよ。

● 日曜日の集会是キリストにしがみついたため

今日は、本当は集会にもつと来ていただきたかった。ある人は、「今日は結婚の仲人のことでどうしても来れません」と連絡してきた。それは止むを得ない。けれども、その人は立派なんです。「どうか、午後にしてください。私は午前には集会有りますから」と言っ



たところが、相手が「こういうおめでたいことは午前でなくてはいかん」と言い張った。本当は喧嘩してもよかつたんだけど。まあ、その人は女の方で、相手が男だものから、一応退かれて、非常に残念がつて電話をくださいました。

「日曜日の午前は何がなんでも、私は神さまとつ組むためにこの集会に来る。キリストにしがみついたために、キリストの中に入るために来るんだ」

と、そういう集会ですよ、これは。そのためには、この世的なものと戦わなくてはダメです。学生諸君でお金がなかったら、一里でも二里でも歩いて来たらしい。昔の人は大体、そういう気魄を持っていました。

天野貞祐先生も内村鑑三先生の集会には、学生時代に雨が降っても風が吹いても、柏木まで歩いて通ったんだ。今でも、内村先生に対しては天野先生は尊敬の念を持ってらっしゃる。

「内村鑑三とヒルティが私の魂の世界をつくった」

と、先生から直接に私は聞いた話です。

私もとにかく明治の人間ですからね。どうぞ、皆さん、今の日本の一般の風潮は本当にダメだから、毅然としてくださいよ。青年諸君は——明治維新の志士たちのあの気魄はどうですか——本当の福音を持つている者はそれだけの毅然としたものがなければダメです。

このあいだ——一か月に一度、私は天野先生の所へおじゃまするんですが——天野先生は、

「小池君はキリストのことを無者と言ったが、本当に素晴らしい言葉だ」と私に言われた。

「君は、なんかいろいろ言葉を つくるね」

「自然にそうなるんです」

と、私は答えました。

●不虔と不義

ここにはマイナスの「不」の字が出ているが、私たちは「虔」と「義」を見ればいい。何も「不虔」と「不義」なんて消極的に考える必要はない。「不」を取ってしまえばいい。

「我は虔と義なり」

と。キリストの虔をいただき、キリストの義をいただくわけだ。キリストは本当の虔者、神を神とした人です。自分を神の前に無にした人なんです。だから無者という。

そういう、神を神としないような御利益宗教も、いわゆる観念宗教も、霊的傲慢もだめだということ。いいですね。これがパウロの本当の信仰でした。

パウロは霊的傲慢な奴だった。それでキリストにこっぴどくやられた。ダマスコ途上でひっくり返された。霊的な傲慢だから、キリストは霊をもつて撃つたんだ。いくら話したつ



て聞きやしないよ、そんな霊的傲慢な人間というのは。ガンと別な強烈な霊で撃たないと。それで参ってしまった。

不虔から、諸々の不義が始まるわけです。「不義」という言葉は、もちろん神に対しても言いますけれども、人間関係の間です。この場合はそうなんです。人間関係のいろいろな間違いが、この不義というやつです。不虔は縦の神さまとの関係が間違っている。不義というのは横の人間との関係が間違っている。自分自身に対してもやつぱり不義がある。そこに神の怒が現れたという。ですから、18節というのは凄い言葉ですよ。

さつき、エペソ書5章6節を引用したでしょ。

「汝ら人の虚しき言に欺かるな、神の怒はこれらの事によりて不従順の子らに及ぶなり」

「はいっ」と言って神に従わない子らに神の怒が及ぶという。

●頑固が砕けるか

それからロマ書2章5節、

「汝頑固と悔い改めぬ心により己のために神の怒を積みて、その正しき審判の顕るる怒の日に及ぶなり」

審判の日のことです。「頑固と悔い改めぬ心」というのは同じことだけでも、要するに砕けない心というのが「頑固」というやつ。自己主張が頑固なんです。これが実は「罪」なんです。人間は頑固か、砕けるか、どちらかに分けられる。十字架の片一方の盗賊は頑固の方。もう片方の盗賊は最後に砕けた。砕けて方向転換することが「悔い改め」ということです。

コロサイ書3章6節に、

「神の怒はこれらのことによりて不従順の子らに來るなり」(コロサイ3:6)

と、同じことがここにも書いてある。そして、5節から8節まで、そこにいろいろ悪徳のことが書いてある。今日はまた悪徳がたくさん出てくる。リストみたいなのに。それと参考するようなところですよ。ロマ書1章28節から31節まで、ずっと悪いことが書いてある。それと今のコロサイ書3章。「神の怒」ということはいろいろ方々に出ています。テサロニケ前書2章、テサロニケ後書2章、黙示録6章。特に黙示録6章16、17節は、最後に神の怒が爆発して、小羊の怒となる。そして、みんなやつつけられるところだ。

●被造物の中に神性が現れている

19その故に神につきて知り得べきことは彼らに顕著なればなり、神これを顕し給えり。20それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物に

より世の創より悟りえて明かに見るべければ、彼ら言い遁るる術なし。

「永遠の能力と神性」は「見るべからざる」とある。見えない。根底には見えないものが



ある。それが「造られたる物により世の創より悟りえて明らかに見るべければ」という。即ち、被造物の中に神性が現れている。神の力がそこに現れている。

そのことを一番よく見た人はゲーテです。ゲーテは本当に見るひと。ゲーテは自然に於て神の神性の現れを見た人です。もちろん、キリストに於て最も素晴らしいことを彼は見た。やはり彼は彼らしく聖書を身につけていましたから。いわゆる正統信仰というようなことではなくて、また、概念的に何のかんのかのと言うことではなくて、ゲーテには聖書が溶け込んでいます。だから、彼の文学は凄い。豊かなんです。どうしても違う。それは神と自然と我が溶け込んでいるような境地で彼はやっているから。ただ概念的な分析ばかりを妙に神経質になってやっている者よりか、よほど本当の世界を彼は生きていた。

ゲーテのそういった霊的な、一如的な実存というものを読んでいるのは、仏教の方で浄土真宗をやっていた坊さんみたいなドイツ文学者がいる。やっぱりそういう人はよく見たね。私と非常に共通なところがある。そういうもんだよな。

新約のキリスト以前に、もう既に神性は旧約の世界に於ても現れている。キリスト自身も、野のアネモネの花、野のユリを見て、そこに神の栄光を見て、

「ソロモンの栄華もあの花にかなわない」

と言われた。神の力が花に顕れている。だから、私は

「神は最大の芸術家である」

と言う。神さまは活ける芸術家です。活ける作品を造るんだから、神さまにはかなわない。芸術的な作品はまた別な評価ですけれども、神さまの作品にはかなわない。ロダンがいかにすばらしい彫刻家であつても、活ける人間にはかなわない。これは神さまが造つてるんだから。

●現象において本体を見る

見えないものが見えるものに於て現れている。本質が現象に於て現れている。神性というものがそこに現れている。本質と現象をもつとも凄く自現したものがキリストです。

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。父という驚くべき神性がキリストに於て現象したわけです。

「自分は何者でもない。ただ、神さまがここに現れたんだ」

と。これを言えたら大変なもんですね。

本質と現象。内なるものと外なるもの。ゲーテと言う人がそうなんです。内なるものと外なるものが、彼にも一つになっている。現象に於て本体を見ている。花に於て太陽の光を見ている。土の中の養分を見ている。だから、本当の本体を把めば現象せざるを得ない。観念信仰は本当の本体を捉^{つか}んでいないから現象しない。さっき私が言った御利益とは違いますよ。神の栄光の現われとして受けとるだけの話です。



「ああ、神さまはすばらしいな」と、自分の病が治ったことも忘れて、神さまを讃えてほしい。」「治つて、どうもこれはありがたいな」なんて。「ありがたい」はいいけれども、治ったことだけに、現象にとらわれたらダメです。現象において本体を見てなければ。一方に捕らわれたらダメ。だから、それは根源現象であるとも私は言ってるわけです。人間の世界にはズレがあるから、ズレでもって、ズレを気にするな。いつも根源を見ていようと祈りたるが必ず成就しているんです、根源の世界では。神さまに即して祈った祈りはそこに成就している。御利益の祈りはだめです、いくらそこに成就したとしても。いいです。すね。

本当の平安と力はそこから来る。ここから来るのは決まってるんだ。ここに魂が坐っていないければ、平安も力も来ないんです。だから、

「神さまの栄光が現れ給え」

という角度から祈れば、成就するではないですか。

こないだも、ある方が——私が按手して祈ったら——「先生に按手してもらったら、すっかり治ってしまった」と言っていました。私は治すためにやっているのではない。ただ、キリストの力が現れたもうだけの話です。本当に皆さんはそういう世界を生きてくださいよ。苦しんでいる人、悲しんでいる人、悩んでいる人、そういう人たちが何かを求めている。その求めに対しては、本ものをもって応ずるのがいい。求めないで何のかんの言つて、疑ったり批判したりするのは、そんなのには豚に真珠だから、福音は伝えなくていいよ。御利益になつちやうから。

被造物の中に神性が現れている。私たちにも神性が、霊が止まっている。だから、霊止という。霊止、即ち一如の世界です。そういう現実でなければ、信仰なんかつまらんですよ。「それでは、一如になつたらその人は聖人か」と。決して然らず。罪びとですよ。キリストは罪びとの中にやつてくるんだから。

●地獄行き罪

21 神を知りつつも尚これを神として崇めず、感謝せず、
ほら、ここに「神を神として」と言ってるではないですか。

その念は虚しく、その愚なる心は暗くなれり。22 自ら智しと称えて愚となり、
人間的な知識、判断が実はみんな愚かになつてしまふ。

23 朽つることなき神の栄光を易えて朽つべき人および禽獣・匍う物に似たる
像となす。

これは偶像のことです。このあいだ、「神の義と人の義」というお話をしましたが、そういうわけです。まあ、たくさん偶像があるものな。牛を拝んだり。インドが牛をあんなことにしているのもおかしい話だ。



24 この故に神は彼らを其の心の慾にまかせて、互いにその身を辱しむる汚穢に付し給えり。25 彼らは神の真を易えて虚偽となし、

この「虚偽」は偶像の内容なんです。ヘブライ語の「シケル」という字です。これはやはりイザヤ書にも出て来ます。偶像のことを「偽り」とか「虚しさ」と言っている。

造物主を措きて造られたる物を拜し、

これは正に偶像です。

且これに事う、造物主は永遠に讃むべき者なり。アアメン。26 之によりて神は彼らを恥ずべき慾に付し給えり、即ち女は順性の用を易えて逆性の用となし、

これは性的倒錯現象だよ。

27 男もまた同じく女の順性の用を棄てて互いに情慾を熾し、男と男と恥ずることを行いて、その迷いに値すべき報いを己が身に受けたり。

この頃はそういう悪い性的な遊びがあつたらしいね。今でも大分あるようだけれども。

これはおかしな話ですが、「レスボス」というエーゲ海の島がある。その女性が同性愛で、そういう性的な倒錯があつたらしいんで、あれはレスボスという島の名前から来てる言葉です。また、男性の方にもそういうのがある。そんなことをパウロは遠慮なく書いてしまっているわけだ。

28 また神を心に存むるを善しとせざれば、神もその邪曲なる心のままに為すじき事をするに任せ給えり。

神さまに放つたらかされてしまった。神さまに見放されて、怒の対象にもならなくなってしまったら、これはお終いです。そうすると、いい気になって、どんどん下り坂になってしまふ。

29 即ちもろもろの不義・悪・慳貪・悪意にて満つる者、また嫉妬・殺意、
紛争・詭計・悪念の溢るる者、

「嫉妬」は女性の犯しやすい罪で、「紛争」は男性が犯しやすい罪です。

30 讒言する者・誘る者・神に憎まるる者・侮る者・高ぶる者・誇る者・悪事を企つる者・父母に逆う者、

また、学校では先生に逆らう者、

31 無知・違約・無情・無慈悲なる者にして、斯る事どもを行う者の死罪に当たるべき神の定を知りながら、ただに自己これらの事を行うのみならず、また人の之を行うを可しとせり。

「死罪」というのは、みんなこれは地獄行きの罪だと言っんです。



● ダンテの地獄

ダンテの地獄の罪の表を書いたから、ご紹介します。ダンテというのは大変な詩人ですよ。ダンテの話をしたらきりがありません。私の著作集第二巻(『芸術の魂』1976年刊)にダンテのことが書いてある。

地獄には「地獄前界」(アンティ・インフェルノ)というのがある。これは「地獄もこれを入れるのを拒否する連中だ」という。どういう人たちかと言うと、無性格者です。善くもなく、悪くもない。黙示録のところで、

「生まぬるぎ者を吐きだす」

とキリストは言ったでしょ。

「¹⁵われ汝の行為を知る、なんじは冷かにもあらず熱きにもあらず、我は寧ろ汝が冷かならんか、熱からんかを願う。¹⁶かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温が故に、我なんじを我が口より吐出さん。」(黙示録3・15)

と。これは生まぬるい連中なんだ。生まぬるい信仰ではだめですよ。吐き出されてしまう。地獄にも入れない。これは卑怯な者、日和見連中です。本地獄に上獄と下獄がある。上の方の地獄と下の方の地獄。

上獄

第一圈 チエルキ 異教徒・異教徒の中の未受洗の幼児

そんな幼児が地獄では気の毒だね。ダンテはカトリック的な考えからそういう判断をしている。幼児は、受洗してなからうが、そんな地獄ではないと私は思うけれども。

第二圈 邪姪の人

第三圈 暴食の人

これは暴饮暴食だ。暴饮してはいかんですよ。肝硬変になったら、おしまいだものな。

第四圈 どんよく 貪欲の人

欲が深い。

第五圈 ふんぬ 忿怒の人

ここまでは放縦の罪です。感情的な動きの罪です。放縦というのは情緒的な動きの罪なんです。これは地獄でも上の方だ。そう重いものではない。どういう罪が重いかというと、意志的な罪が重い。反抗するやつ。だから、パウロの霊的傲慢なんていうのは最大の罪だった。あれをひっくり返されて、パウロは今度は、地獄のどん底から天界の一番高い所へ行ってしまった。パウロが一番よくそれを表している。地獄のどん底的なことをやっても、悔い改めれば、天界のもの凄いとこに上がって行ってしまおう。

その次は、DITE(ディーテ)の城というのがあがる。上獄と下獄の境になっている城です。あそここのところはきれいに、おもしろく書いてあるね、何か目に見るようだ。ダンテの『神



曲』はいっぺん読んでくださいよ。

それから下獄です。

第六圈 異端者

第七圈 (第一円) ^{ジローネ} 他虐者、他人を虐待したり虐殺したりする悪い者

(第二円) 自虐者、自殺しような者

(第三円) 瀆神者、神さまを ^{ないがし} 蔑ろにする連中

これが凶暴の罪という。

第八圈 (第一 ^{ボルジア} 囊) 女を売る者、女を欺く者

(第二 ^{ヘツラ} 囊) 諂う者

(第三 ^{シモニア} 囊) シモニア

シモニアの罪を侵す者。使徒行伝に出てるでしょ。神的なものを売買することです。

(第四 ^{魔術者、占者} 囊)

(第五 ^{公金消費者} 囊)

(第六 ^{偽善者} 囊)

(第七 ^{盗人} 囊)

(第八 ^{偽証者} 囊)

(第九 ^{鬭争者} 囊)

(第十 ^{詐偽者} 囊)

こういうのがみんな悪意があるんだ。「心の清き者」の反対がこれです。「心のきたない」というのは、そういうった策略をもちいたりする、悪意をもった者。

第九圈 (第一円) 血族の義に背く者

(第二円) 郷土の党与を売る者、裏切る者

(第三円) 賓客の信に背く者

(第四円) 恩人を売る者

これが一番悪い。ユダなんてはここにいてるわけだ。キリストを売ったんだから。サタンがまさにこれなんだ。サタンはどん底にいますから。

●地獄は罪の認識のため

そのわきを通って、今度は煉獄の方へ行く。煉獄の罪はまあ、いいです。これがまた別な意味で出てきますから。浄罪山というのがあって、そいつがだんだん浄罪されていく。罪から浄罪されて、今度は天界へ往くわけです。

実は、ダンテはアリストテレスの「倫理学」やアウグスティヌスも使っています。アリストテレスやアウグスティヌスの罪の分類の仕方はかなり近いわけです。要するに、情的なものから意志的なものへと、だんだん罪は重くなる。意志的なもので一番悪いやつは霊



的な罪です。霊的傲慢というやつ。これはサタンですから。

「お前も神の如くなるだろう」と言つて誘つて来たでしょ。霊的傲慢です。「神の如くなるだろう」と言つて、神ぬきにして、神の如くなるうとするのはサタンです。神さまに入れて、神の如くなるのは、これは天使になる。同じ「如く成る」だつて違うんだ、その成り方が。そこは紙一重で大間違い。神にならないで、サタンになってしまう。

ここにパウロがいろいろなのを載せたのは、みんなこのどこかへ入るわけだ。ダンテは詩人ですから、こういうようにして地獄を描いた。一人の人間がどれかに、一つだけ当てはまるといふことはないですよ。あの人はこういう面が強かった、ということはあるけれども、それだけというのではないわけだ。人間というのは複雑な構造だから。現実の人間というものは、天国的なものもこの地獄の中に入っているんだ。けれども、罪を人格化して分類すると、このようなことになるという。

ダンテはこれにおいて実は自己認識をしていた。自分が、関わりないのではない。みんな関わりがある。そこを通過して往かなければ、天界に往かれないぞと。本当の罪の認識をして、それから、この罪との戦いが浄罪山だ。地獄は罪の認識のため。浄罪山は罪との戦い。それから、それに勝つたら今度は天界に往くと、こういうわけです。これがダンテの『インフェルノ・プロガトリオ・パラディーソ』（地獄・煉獄・天国）という『神曲』です。何と言つても、ダンテの詩は世界最大と言つてもいいでしょうね。

ゲーテもやはりこういう構造にはちよつとかなわないよな。藤井先生の『羔の婚姻』とこののは世界の歴史を神の歴史として叙してこられた。黙示録まで行つて、途中で仆れてしまった。あれはもつと内容がきれいなものです。罪のことではない。

ダンテはこういった罪に対しての、その罪びとが地獄で苦しんでいる苦しみ方について、いかにも罪に適したような叙述をしている。そこらは非常に彼は実践心理学者だね。数理的にも実に整っている。

●キリストの敬虔と義をいただきたい

罪がひとつひとつ、どうのこうのなんて言う必要はひとつもない。パウロがここに挙げましたが、結局そのようなおかしなことにみんななってしまう。だから、たくさんの民法や刑法の問題をあげてくれば、これは法律をやる人は結局、霊法の世界になる。福音の人が法哲学というものの凄いものをひとつ書くといい。本当に福音を把んでいる人でなければ、法哲学は書けないわけです。いわゆる条項式な法でもって、やれ法の解釈がああだこうだと、そんなことばかりやって、裁判には時間がかかるし。現実には仕方がないね。

すべての問題の帰着するところは結局、この不虔不義からはずれて、本当のキリストの虔と、キリストの義に帰ることです。キリストの信とキリストの義は即ち恩恵でありますから、そこに帰るときに、我々はこのもろもろの律法から審判を受けるところの、もろも



ろの罪、ダンテが地獄に描いたこの地獄の罪から解放される。

何も地獄を通らなくてもいいよ、こんなものは見なくたって。いきなり天界に往つてしまふ。地獄を見るのはご苦労さんな話だ。地獄を見ているうちに地獄になってしまったら大変だ。

ダンテが地獄の門にこういう文句を書いた。

「我をよぎりて憂愁の都へ

我をよぎりて永劫の憂苦へ

我をよぎりて滅亡の民のうちへ

義がわが高き創造主を動かし

神の力、至高の知恵

また本源の愛、我を造れり」

大変な言葉ですね。ロダンがこの地獄の門を彫刻しましたが、地獄は憂いと苦しみと滅亡の都、国なんだ。それは何が造つたかというところ、

「義が、わが高き創造主を動かして、神の力、至高の知恵、また本源の愛が我を——「我」

とは地獄の門のこと——造つた」

とある。地獄の門に書いてあるわけだ。地獄は神の義と愛の故にできてしまった。厳然とした審きによって、地上で地獄的な苦しみに遭つた人たちを本当に天界に上げるために、罰せられる者が罰せられるということが「根源の愛」という意味でしょ。どうして地上でこんなに自分は苦しまなければならないかと、遂に殉教の死を遂げた人たちがいます。その人たちが「どうぞ復讐をしてくれ」と祈っている。黙示録6章に、

「悪い者を復讐してくれ。いつまで私たちは忍ばなくてはならないのか」

と、そういう角度から、「根源の愛がつくつた」とダンテは言ったんでしょ。罰せられる者はこのようにして罰せられてしまう。どんなに地上で義のため、愛のために苦しんでもいい。あなた方は天界に往くよと。

私たちは今、このマイナスのことが書いてあるのとは逆に、キリストの敬虔とキリストの義をいただいて、地獄を経なくても、いきなり天的現実の中に入って往こうというのが、逆の読み方になるわけです。

